

九州方言学会編1969 『九州方言の基礎的研究』
 糸井寛一1976 「豊日・肥筑方言」(『新・日本語講座
 3』)
 鏡味明克1976 「中国方言」(『新・日本語講座3』)
 藤原与一1977 『昭和日本語の方言4』三弥井書房
 神部宏泰1978 『隠岐方言の研究』風間書房
 平山輝男編1979 『方言基礎語彙の研究序説』
 岡野信子1980 「くらしのことば」(『長門市史・民俗

篇』)
 藤田勝良1981 「山口県長門市旧深川地区に置ける待
 遇表現の諸相」(『日本語研究4』)
 中川健二郎1982 「山口県の方言」(『講座方言学8』国
 書刊行会)
 中条修編1982 『静岡方言の研究』吉見書店

(東京都立大学大学院学生)

ユキの意味と方言形式

平澤 洋 一

1. はじめに

日本人にとっての「雪」は、『万葉集』『古今和歌集』『源氏物語』『新古今和歌集』『金槐和歌集』『山家集』『義経記』『笈日記』をはじめ実に多くの作品で扱われてきた(『ことばとくらし』8号、『意味の世界と日本語』で詳説)が、雪国の「雪」を素材にしたものは驚くほど少ない。また、描出されても「雪降れば木々のこのはも春ならでをしなべ梅の花ぞ咲きける」(『和泉式部日記』)や「いざ行む雪見にころふ所まで」(『笈の小文』)のような評価度の高い描かれ方は、雪国の人々からはほとんどされなかった。なぜであろうか。

雪国の「雪」は、あまりにも生活に密着し生活に重くのしかかってくる「雪」であり、冬の日々は「雪」との関いの明け暮れであったからであろう。程度の差こそあれ、「越後のごとく年毎に幾大の雪を視ば、何の楽しき事かあらん。雪の為に力を尽し財を費し千変変若する」(『北越雪譜』上之巻)といった受け止め方は、今でも見られる。それだけに、「雪」に関する方言語彙は、切実な評価・感情的意味をもつことが多い。

このような「雪」は、どのような意味の広がりや表現の形式をもつのか。ここでは豪雪地の一つ新潟県小千谷市大字蘇生のユキ語彙(老年層)を中心に、ユキと生活と方言との関わりをみていくことにする。

この地方にユキのある期間は、年によって違いはあるが、おおむね次の4期に分かれる。

- i 初雪・根雪初期=11月中旬~12月中旬ごろ。ユキが水っばい。
- ii 根雪中期=12月下旬~3月上旬ごろ。晴間なく降ることが多い。
 - (i) 12月下旬~1月上旬ごろはワタユキ(綿雪)が多い。

(ii) 1月中旬~2月初旬ごろは最も寒い。コナユキ(粉雪)がふつう。

(iii) 2月中旬~3月上旬ごろはよくボタンユキ(牡丹雪)が降る。

iii 根雪晩期=3月中旬~彼岸ごろ。晴間が多くなる。

iv 雪解け期=彼岸過ぎ。降ってもハルユキ程度。方言生活の場でユキの細かな意味領域を表現するのは、語とは限らない。句のこともあれば、特に定まった方言形式をもたないものもある。形態だけを基準にしたのでは「意味」の全体像がつかめないこともある。そこで、意味的類似性と対立性を重くみて意味領域を分けていくと次の類型を得る。

- a 初雪を表すもの
- b 降雪を表すもの
- c 積雪を表すもの
- d 雪質・雪状を表すもの
- e 雪害・関雪を表すもの
- f 民俗を表すもの

2. 初雪

この地方のユキに対する最大の関心事は、いつ初雪が降るか、いつ本格的な雪が降るか、大雪になるか否か、いつ消えるかである。初雪が例年より遅かったり、冬場の積雪が少ないといったうれしい年には、コトシワマラ フラネアレ イーネ(今年はまだ降らなくていいねえ)やコトシワ チットレ アリガテァネー(今年は雪が少なくてありがたいねえ)が挨拶ことばになったりする。

初雪の前にはユキガンナリサマ(雪雷様)が聞こえる。例年、11月に入るとユキがいつ降ってもおかしく

ない気候になってくる。昔からユキガンナリサマが運んでくるといわれている。真黒な雲が空をおおって辺りが暗くなる。これをクラヤムという。この雲は雪雲であるが、雪雲に対する方言形はない。空一面がこの雪雲になるから特別ないい方は要らないからだという。雪雲に限らず、雲で空が暗くなるのがクラヤムで、夕立などで暗くなる時にも使う。

雪雲が空一面に広がってクラヤム空をユキゾラ(雪空)と呼ぶ。寒さも厳しくなっていく雪になってもおかしくない様子になってくる。ユキモヨー(雪模様、雪が降りそうな様子)とはいうが文語的であり、何といても方言らしいのがユキッカガ スル(雪香がする)。時期、寒さ、空模様などを総合しての表現で、降り出しそうな時とか、降っている雨が雪に変わりそうな時にいう。ただし、ネユキ(根雪)が降ってからは使わないようである。フリソラネ ユキッカガ スル(降りそうだねえ、雪になりそうな感じがする)などと挨拶を交わしたりする。ユキッカガ スル時は、ソラクラヤンデ ユキガンナリ ナッテル(黒い雲で空がおおわれて辺りが暗くなり雪雷が鳴っている)ことが多い。

ハツユキ(初雪)は、年によって違う(以下同様)が、11月の中旬ごろ1~3日程度降ってすぐ消える。ニクウイメ(2度目の積もる雪)、サンクウイメ(3度目の積もる雪)くらいまで降っては消え、あとはネユキ(降り積もったら年を越えて春先まで消えることのない雪)になる。ハツユキからネユキまでの期間はマチマチである。カナグラヤマニ ニクウイ ユキガ フラネアーウチワ ネユキニ ナラネアー(金蔵山に二回雪が降らないうちは根雪にならない)といわれてきた。

3. 降雪

ワタユキ、コナユキ、ボタンユキ、シメツポユキ、ハナユキなどが降る。

ワタユキ(綿雪)＝軽くてかさばる大片の雪をいうが、共通語的。12月中旬~1月上旬、2月中旬~3月上旬ごろによく降る。

コナユキ(粉雪)＝とても細かくて粉状の雪、粉雪、細雪。1月中旬~2月初旬ごろの厳寒期に降る。"嫌だなあ寒くて"という語感をともなう。ササメユキという方言形はない。

フーキ(吹雪)＝激しい寒風に吹かれて雪が降ること、その雪。大吹雪。2月が最も多く、歩いられないほどのフーキが一冬に2、3回は吹く。

フーキレ マッシロンナッタ(大吹雪でく着ているものが真白になった)。フーキは昭和の初め頃まではよく使ったが、今はフブキとかフキという人が多い。これに対し、積もったコナユキが強い風に吹き上げられて舞うことはユキケムリ アガル(雪煙が上がる)と違って区別する。

ボタンユキ(牡丹雪)＝嵩のある大片の雪。前出の綿雪を含めていうのがふつう。12月中旬~1月上旬、2月中旬~3月上旬ごろによく降る。

シメツポユキ(湿っぽい雪)＝湿気が多く重い雪。3月中旬過ぎ、春先になると降る。

ハナユキ(花雪)＝3月の彼岸ごろにちらちらと降る雪。淡雪。4月になって降ることもある。この雪が降ってもほとんど積もらない。

これらは降る雪の種類であるが、降り方によって若干の擬態表現がなされる。ボサボサ、チラチラなどがそれである。

クラヤンデ フル(暗やんで降る)＝空が黒い雲でおおわれ、辺りが暗くなった状態で多く降る。根雪中期まで。

シンケンニ フル(真剣に降る)＝長い時間小降りになることなく降る。昼の降雪にも夜の降雪にもいう。雪質によっては一晩で1m程度積もる。根雪晩期以後は、この降り方はみられない。

ボサボサ フル＝大片の雪がかなり激しく降る。視界が相当さえぎられる。ワタユキに多い。かなり積もる。

マケルホド フル＝まとめて撒くように極めて激しく降る。視界はほとんどきかない。積もり方が最も速い。

サラサラ フル＝乾いてサラサラした雪が降る。コナユキ(粉雪)にいう。寒さがゆるむとボタンユキに変わる。

チラチラ フル＝少量の雪がちらつく程度に降る。

ハナユキ(花雪)やハルユキ(春雪)に多い。

ヤダゲニ フル＝少し春めいた陽気の中でハナユキ(花雪)などがほんの申し訳程度に降る。シンケンニ フルと好対照。

降っていたユキが止むのはヤムであって雨の場合と変らない。梅雨はアケル、秋の長雨はアガルというが、長い間降り続いたユキが止むのはミナレルという。長雨にも使うことがある。

4. 積雪

ある場所の積雪を表すには、ふつうヤネンユキ(屋

根の雪)、ハタケンユキ(畑の雪)、カワランユキ(川原の雪)、ハナンユキ(屋根の滑り止めから先の部分の雪)などという。つまりAンBのようにいう。Aは場所、Bはユキである。Aの名称は、ユキの積もっている時と、夏場のようにユキの全くない時とで変わることはない。AンBのいい方をしないのは次の場合である。

カブリ＝雪がたくさん積もって庇のように突き出た部分。ワタユキやボタンユキの時にでき易い。放っておくと突然ドサッと落ちてきて危険なので早目早目に取り除く。

ヤブ＝雪がかなり積もっている平地や坂などのうち踏み固められていない部分。足を踏み入ると膝や腰、大降りの翌日などには胸までダブル(雪に足をとられて)潜る)。深くドブリながらヤブの中を進むことをヤブ コザクという。

ハラ(原)＝雪が積もった広い平地。雪原。田や畑も雪が多く降るとハラに変わる。

ヤブやハラの一部をただ単に踏み固めたり除雪しても、その部分に特別の名称はつかない。人が通ったり集まったりする一定の条件が満たされてはじめてユキミチやヒロバになる。新雪を踏み固めるなどして人の通れるようにすることをミチツケという。昨日までのユキミチも、夜中にたくさんの降雪があるとヤブに一変するので、ミチツケをしなければミチにはならない。根雪中期には毎日のようにミチツケが必要である。

積雪の高さはタケ(大)、容積はカサ(嵩)という。タケが平均的な数値より大きければオーユキ(大雪)、小さければコユキ(小雪)ということになる。オーユキは降雪にも使い、キノー トーカマチワ オーユキラッタラシーナ(昨日十日町は大雪だったらしいな)、ヒルッカラ オーユキンナッタ(午後から大雪になった)などという。降雪の少ないことはコユキではなくコブリ(小降り)である。「小雪がちらついている」はユキガ チラツイテルで代替する。

降雪・積雪の多いことはゴーセツ(豪雪)で、共通語と変わらない。ゴーセツは他の地域と比べて雪の多いことをいい(比較基準による比較)、オーユキ・コユキは同一地域の平均的な数値より大きい小さいかを問題にしている(種の基準による比較)ようである。

5. 雪質・雪状

既出の降雪語彙は、雪質を表す語彙でもあるが、ボタンユキは積もった状態のものにはいわず、積もったものを表すにはワタユキを用いる。

ワタユキ(綿雪)＝軽くてかさばる雪。粘着力が結構あるので踏みつけるとよく締まる。造形遊びには最適。雪合戦にもよい。ユキホリ(雪下ろし)もやりやすい。

コナユキ(粉雪)＝細かくて軽い粉状の雪。水分が少ない。衣服についても叩けばすぐ落ちる。積もってもふんわりしている。握りにくい。風に飛ばされやすい。粘りっ気がないので、高く積み上げるのは困難。この雪質のときはユキミチも締らずやや歩きにくい。気温の関係でまだコナユキになりきれないものは雪下駄やスキーなどにくつつきやすい。

フーキ(吹雪)＝激しい寒風混じりの雪。歩けないほど強く吹きつけてくる。

ボタンユキ(牡丹雪)＝嵩のある大片の雪。積もりやすい。簡単に固まるのでコシキやシャベルが使いやすい。雪遊びには好都合の雪。この雪が何十cmか新雪で積もっているヤブに体を倒すと、体の形がくっきりと残る。ダブルと長靴に雪が入るが、この雪だと靴を逆さにして中の雪を出せば、コナユキなどと違って、足はほとんど濡れないですむ。シメッポイユキ(湿っぽい雪)＝湿気が多い。造形しにくいし、スキー・スケートは滑りが悪いし、遊びには向かない。

ハナユキ(花雪)＝降り方に力がない。ふわーっとしている。軽い。積もってもすぐ消える。

ザラユキ(粗雪)＝粗目状の雪。日照時間が多くなるとコナユキやワタユキが少しとけ出したところへ夜の冷え込みを受けてできる。3月も下旬になれば日陰を除いてザラユキだけになる。早朝は氷っているので、日中は歩けないヤブの表面を自由に歩ける。スキーやソリもよく滑るが、滑走板に傷がつく。ザラユキになると雪遊びが限定される。

雪状を表すいい方もいくつかあるが、雪の状態は地形や気象条件によって微妙に違うので、語のように意味領域の固定されたものでは表現できないことが多い。ここでは、日常比較的良好に使われるものを示す。

ネバリケガナクテ ニギリニクイ……コナユキ
フキダマリガ デキヤスイ……コナユキ、フーキ
カチカチンナル……固めたワタユキやボタンユキ
ツルツルンナル＝雪道などが氷ってかなり滑りやすくなる……1月から2月にかけてのユキミチ
カネガ ツク＝雪道などが氷って表面が鈍く光りきわめて滑りやすくなる……厳寒期の夜などのユキミチ

シミル＝日中少しとけた雪が夜になって氷ること、
厳寒期に水が氷ることにいう……ザラユキ
ガリガリンナル＝ユキミチや踏み固めた雪が氷って
固くなる……ザラユキ
ザラザランナル＝氷った雪がスキーのエッジなどで
削られて粗目状になる……ザラユキ

6. 雪害・闘雪

豪雪地帯には、いろいろな形で雪害が起きる。この地方も雪が多いうえに、降雪のところで述べたようなものすごいフーキ（吹雪）が必ず2、3回は吹く。ハラを歩くのは危険である。吹雪の怖さは「北越雪譜」の「雪吹」にみるとおり。

大雪が降るとキシヤ フツーンナル（列車が不通になる）。上越線に比べると只見線が被害を受けることが多かった。そんな日は、小中学校へ通う生徒たちも苦勞する。遠くから通っている生徒の中には朝いつもより早めに家を出て昼頃やっと学校に着く者もいた。そんな生徒は、帰り道がまた心配なので、着いて1時間後くらいに下校させる。これをハヤアガリ（早上がり）といった。

雪は1m、2mとタケを増してくるにつれ重量が増るので屋根、庇、庭木などに被害を及ぼす。

ユキノオモミデ ヒサシガ モゲタ（雪の重みで庇が折れて）とれた）

一日雪下ろしが遅れると家がつぶれかねないので、生業を中断してユキホリに明け暮れることも珍しくはない。昨年末もそうだった。

雪崩や漏水は、次のようにいう。

ナゼ＝雪崩。屋根の雪が滑り落ちるのにもいう。北魚沼郡湯之谷村などではアイとよび、クマヨリ

アイノホガ オッグネー（熊より雪崩のほうが怖ろしい）とって警戒する。

ナゼガ ツク＝雪崩が起きる。屋根の雪が滑り落ちる。

ナゼバ＝雪崩の起きる場所。

ナゼドメ＝屋根などに取りつけた雪崩止め。屋根には金属性のナゼドメを何本も設置するが、ヤネノハナ（庇寄りの数十cmの所）には何もつけない。ここにナゼドメをつけたのでは、屋根の雪の重みが庇の部分にかかって折れてしまうからである。ヤネノハナにはナゼドメがないので、この部分のユキはたいへん崩れ落ちやすい。人々は、家の軒下を歩かないようにするし、玄関はカブリ（雪庇）が落ちてきては危いので、庇の雪を毎朝落とすよ

うにする。また、屋根の雪下ろし時の転落事故が結構あるので、子供を手伝わせる時などには、ヤネノハナエ デンナ カブリエ キー ツケレ（屋根の先端部に出るな、雪庇に気をつけろ）と注意をうながす。

シンモリ＝凍み漏りか。陽気がよくなってとけ出した屋根の水がダケ（二つの屋根が合わさっている所）に集まってきても、氷ついているため流れずに逆流して水漏れすること。3月になると、勾配のゆるいダケの屋根に起きやすい。たい屋根だけでなく新しい屋根でも水漏れする。

ミズアガリ（水上がり）＝雪解けの水で川などがあふれて浸水すること。4月に入ると起きる。

豪雪地の冬は、すっぽりと雪の中に閉じこめられての生活となるが、防雪・除雪・消雪に追いまわられ雪害と闘う冬である。毎年繰り返しやらなければならないことがたくさんある。

ユキガコイ（雪囲い）＝玄関・窓・軒・庭木などを丸木・板・箆などで囲って雪に備えること。

ユキカキ（雪掻き）＝初雪・二回目の雪・三回目の雪・根雪の初期のように、まだ雪が少ない時の除雪のやり方。

ユキ ホゲル＝多く積もった雪を取り除くこと。ユキホゲとはいわない。

ミチフミ（道路み）＝一晩の降雪量が50cmにも1mにもなる根雪中期には、道路の除雪が間に合わなくなるので、カンジキ（楯）やスカリ（大型の楯）で踏みつけて雪道をつくる。ミチツケとも。この作業は、明かるとなるとすぐ始め、新聞配達の人がある前に完了していなければならない。雪の多い日は、たいへんな重労働となる。

ユキ オトス（雪を落とす）＝カブリ（雪庇）・雪囲いをしてない木の枝の雪・街灯などの雪は、こまめに落としておかなければならない。

ユキホリ（雪掘り）＝雪下ろし、それをする人。ユキホリ ゴニン タノングテネ（雪下ろし人夫を5人頼んだよ）。屋根の雪が多くても少なくとも、平地の積雪が屋根より低くても高くなってもユキホリといい、ユキオロシとはいわない。十年くらいに1度は、ユキミチの高さが電柱の頭を越えるので、2階家でも屋根の雪は下へ下ろすのではなく掘り上げる感じになる。

マドアケ（窓開け）＝雪下ろしや降雪で塞がれた窓の雪を取り除いて、アカリ（窓から部屋の中に入ってくる光）がとれるようにすること。

ホリアゲ(掘り上げ)＝雪下ろしした雪や雪道の雪を整理して塔のように積み上げていくこと、その積み上げたもの。雪道から数mの高さになるものもみられた。ゴーギナ ホリアゲガ デキタネ(高くて大きい掘り上げができたね)。

トンネル＝消雪パイプのできる前までの大通りでは、2月頃には雪道が雁木の屋根よりもはるかに高くなって、買物などでこちら側の雁木から向こう側の雁木に移るのが大変になるので、トンネルを掘って往来することがあった。

ユキワリ(雪割り)＝雪解期になると、畑の地温を早く上げるべく、残雪を土が出るまで掘って何本も溝を作ること。ジャガイモなどの作付けのためにやる。

ミチワリ(道割り)＝雪道を鋸で切ったりトグワ(唐鋸)で欠いたりして低くすること。一度に1mも2mも掘り下げることではできないので、ナカボリ(数十cmくらい雪道を掘り下げること)を繰り返す。橋は、雪が多くなると危険なので、真冬でもナカボリを繰り返す。小路や私道の雪道は、雪解け期にのみミチワリをするが、1回では地面まで届かないので、2～3回ナカボリをする。初めて地面を歩けるようになったときの喜びは大きい。やっと春がきた実感がする。

除雪は昔はユキヨケと呼んでいたが、最近ではジョセツが一般的になった。消雪パイプの設置により、昭和38年ごろからショーセツ(消雪)・ユーセツ(融雪)・ムセツ(無雪)といった漢語類も、日常語の中にすっかり定着した。

雪解け期といえるのは、春の彼岸過ぎ。本格的には月遅れの節句(4月3日)を過ぎてからである。若干の俚言がみられる。

ユキゲ(雪消)＝雪解け。ユキゲノミズ(雪解け水)。

ユキシロ＝春になって山の雪がとけること。ユキシロミズ(山の雪解け水)。

7. 民俗

この地方の正月には雪が似つかわしい。雪あつての正月という思いが強く、雪のない年があると、ショーグッツゲラネアーネ(正月らしくないね)と話題にのぼる。

モグラモチの行事も雪がないことにははじまらない。子供たちが何日もかけてユキアナ(天井を藁でおおった雪洞)を作り、コモチ(小正月)の14日の夜に、火鉢や菓子をもって集まり夜明かしをする。翌早朝、横

槌に縄をつけて雪道を引っばって、「モツ モツ モツ グラモチャ ドゴ イッタ ウチニカ ソトニカ オヤドニカ ソコラエ イトラ カッツブセ」と歌いながら歩き回った。モグラの被害を防ぐためにやったもの。今はこの辺ではみかけない。

サイノカミ(塞の神)の行事も雪がないと感じが出ない。「小千谷市史」上巻に次の記述があるが、蕨生のもとは字大崩のものに近い。高さ数十cmくらいの雪の台を造って、その上に注連飾りや藁を積み上げて塔を作る。鳥形は太い注連縄で作った。

正月飾りや注連縄などを各戸から集めてきて、村内の数ヵ所で焼く行事である。行事の主役は子供たちであるが、若者や大人も手伝う。竹や木を芯にしてシメ飾りや藁などで三、四米くらいの塔を作り、その上に藁縄で作った鳥形をつける。これを焼く火にオンベという細長い切紙の束を棒の先につけたものや、習字の紙などをかざし、舞い上がる高さを競ったりする。子供が六歳になった家でオンベを上げるとい村(大崩)や、ドーラクジンの形を作って焼くという村(戸屋・冬井)がある。またサイノカミの火で焼いた餅を食べると疫病除けになるという。若栃ではこの餅を保存し、マムシ除けに山仕事るとき持って行く。また若栃ではサイノカミの塔を作らず、雪洞を作って灯明をあげ、その前でシメ飾りを投げ込んで焼く。(1057頁)

ユキマツリ(雪祭り)は現在は行われていないが、戦前は結構盛んだった。ユキアソビについては、「雪遊び語彙と意味体系」(「平山輝男博士古稀記念 現代方言学の課題」第1巻)を参照されたい。

昔話としてユキオトコ(雪男)・ユキオンナ(雪女)の話をよく聞かされた。

ユキオトコ＝良い子になっていないと大きな雪男が出てきてさらっていくという話。炬燵に入って年寄りからこの話を聞いた。ユキオンナ＝雪の降る寒い日、夜中の12時過ぎに、真白な着物を着て髪を長くした雪女が出てくる話。雪のいっぱい積もった真冬の夜にこの話をすると、子供たちはとても怖がった。

生業の中で雪と切り離せないのが小千谷縮の生産の一工程を担うサラシヤ(晒屋)である。織りあがった麻織物(縮・上布)を白くするため雪の上に晒すこと。3月になって晴れ間が出る頃から雪解けまでの間、朝に反物を広げては夕方に入れ、同じ反物を何日も雪に晒す。基本的なやり方は、江戸時代のそれと変わらない。

晒場には一点の塵もあらせざれば白砂の塩浜のご

とし。さて白ちゝみはおりおろしたるまゝをさらす。余のちゝみは糸につくりたるを拐にかけてさらす。その拐とは細き丸竹を三四尺ほどの弓になして、その弦に糸をかけ拐ながら竿にかけわたしてさらす也。白ちゝみは平地の雪の上にもさらし、又高さ三尺あまり長さは布ほどになし、横幅は勝手にまかせ土手のやうに雪にてつくり、その上にちゝみをならべてさらしもする也。(『校註北越雪譜』上之の巻、ルビ略)

8. 比喩・慣用句

共通語の「雪」は①空気中の水蒸気が氷結して降ってくること、その積もったもの、②雪景色、③白髪、④白いものなどに用いられるが、当該方言のユキは①、②、④にのみ用いる。③はシラゲである。④が比喩用法となる。コノアカンボノハダワ ユキミターニ シーロイネー (この赤ちゃんの肌は雪みたいに白いねえ)。白い肌はユキハダ (雪くのように白い)

肌)と、複合語の形でもいう。雪の白さは慣用句にも使われ、ユキト スミホド チガウ (正反対に違う、月とスッポン) という。値段・品質・性格などの対比に用い、この表現には話者の評価が明確に加えられている。これに対し、たとえば値段の大きな違いについて、単に比べているに過ぎない場合には、バカ ジョーゲガ アルネー (ずいぶん差があるねえ) などという。この表現では評価を個々の対象にはくだしていないという差があるという。

冷たいものなどに単語のユキの使われることはないようで、固体の冷たさにはコーリ (氷) が、液体の冷たさには複合語ユキミズ (雪水) が使われ、コーリミターニ ハッコイ (氷みたいに冷たい)、ユキミズミターニ ハッコイ (雪水みたいに冷たい)のごとく表現される。

(城西大学女子短期大学部講師)

自他対応の不規則性

—「ぬける」「ぬく」「ぬかす」を例として—

福田 明子

1. はじめに

日本語には共通の語幹から分岐した動詞で、自動詞と他動詞という関係になっている例が多く見られる。自他の対応とは大ざっぱに言えば、ある一つの^(G1)ゴトを二つの動詞 V₁ と V₂ により次のように二通りに表現でき、更に V₁ と V₂ が共通の語幹から分岐してできたものである場合の両者の関係を言う。

(1) NP₁ ガ V₁

(2) NP₁ ガ NP₂ ヲ V₂

「ほける」「ほかす」は自他の対応をなすと考えられる。

(3) 事件の核心が ほける。

(4) 刑事が 事件の核心を ほかす。

ところが、奥津1967で指摘されているように、自他の対応は「単に動詞に限られる問題ではなく、それを含む文全体に関わりを持」っており、自他が対応していると思われる動詞でも、用例を一つ一つ見ていくと、それほど単純に(1)から(2)へ、(2)から(1)へと言い換えができるわけではない。

奥津1967では、この「ほける」「ほかす」について次

のような例を挙げている。

(5) この頃 頭が ほけてきた。

(6) *この頃 頭を ほかしてきた。

(5)から(6)への言い換えはできない。次の例も同様である。

(7) 壁の色が ほける。

(8) *彼が 壁の色を ほかす。

厳密には、(3)と(4)、(5)と(6)はいずれも自他が対応しているとは言えない。

本稿では自他の対応について、「ぬける」「ぬく」「ぬかす」を取り挙げて考察し、自他の対応を考える一助としたい。

このうち、「ぬかす」は形の上では単他動詞^(G2)「ぬく」を他動化してできた複他動詞のようである。一般に、単他動詞と複他動詞の間には次のような格の交替が見られる。

(9) NPガ NPヲ Vt (Vt: 単他動詞)

(10) NPガ NPニ NPヲ Vdt (Vdt: 複他動詞)

これに「ぬく」「ぬかす」をあてはめると。